

八重山の家譜覚書

著者	新城 敏男
雑誌名	沖縄文化研究
巻	9
ページ	228-282
発行年	1982-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015581

八重山の家譜覚書

新城 敏男

一、はじめに

八重山の家譜（一般には系図とよばれる）は、これまでも歴史資料として広く活用されてきた。八重山での利用は、特に喜舎場永珣氏の、歴史・民謡などの解明に大きく与っている。⁽¹⁾しかし、沖縄本島を含め、家譜全体の研究はようやく緒についたばかりである。特に那覇市史編集室の精力的な家譜蒐集は、『那覇市史』資料篇の、家譜資料(一)・(二)上として公刊された。家譜資料(一)は、蒐集家譜から九六冊を選び、それから七八七人の人物を彼が黄冠に叙せられたことを基準に選出し、その譜記を年代順に表出している。(二)上は、那覇の久米村に住した渡来閩人三十六姓の末裔の家譜五一冊を五十音順に全て翻刻している。さらに家譜資料として、首里系・那覇系の続刊が計画されている。これらの公

刊は、今後の家譜研究、沖縄歴史研究に多大に寄与しうるものとなるう。

それらをふまえて、田名真之氏は「琉球家譜の成立とその意義」（『沖縄史料編集所紀要』第四号）で、家譜成立の時代的背景、成立時期、書式、組立と仕次・冊分など全体的把握を試みている。さらに同じく家譜といっても、首里那覇系と久米村系とでは記録の記載形式、その他に相違がある。また沖縄本島家譜の世系図上部に捺される、御朱印「首里之印」は王府による家譜頒賜の象徴とされるが、宮古八重山の両先島家譜には、それがない。

また宮古島関係の家譜のほとんどが『平良市史』資料編Ⅰに収録されたことは両先島の家譜研究等にとって誠に有意義なものとなるう。

八重山家譜の研究は、喜舎場永珣氏の後には宮良高弘氏による一門（門中）研究の一連の業績があり、最近では宮地檀子氏の「岳昌氏の出自―家譜研究の一試論―」（『八重山文化論集』第二号）がある。しかしここでも、家譜全体、あるいは歴史資料としての存分な利用の可能性は今後の課題である。

従来、家譜のほとんどは他見を許さず格護されてきたが、近年は石垣市立博物館の積極的な努力により、そのコピー蒐集が行なわれ、次第に家譜研究が可能になりつつある。この小文をなすことが出来るのも、石垣市立博物館・那覇市史編集室・沖縄県立図書館などの機関による蒐集家譜、ならびに宮良高弘氏の撮影フィルム、所蔵者各位の御好意によって拝見しえたことによる。しかし現在までに拝見しえたものは、別表Ⅰに示した八九本にすぎない。八重山の家譜総数がいくらなのかは、沖縄本

島の系図座「氏集」⁽³⁾（総数二八九一冊）からは両先島・久米島が除外されているので未詳である。『八重山歴史』（一九五四年刊）附録の姓氏一覧は、天災や火災などで消失した系図、他府県へ転出した系図、石垣島以外の離島の系図を除いたものだが、実存するもの五九氏、その他諸記録ならびに系図から抜萃したもの一〇氏を挙げている。これは姓氏一覧のため「氏集」とは異なり、分家家譜数などは不明である。宮地檀子氏が明らかにした岳昌姓では、大宗家譜の他、三世で三人、四世で二人、五世で一人、六世で一人の七人が、それぞれ別家譜を組み立てており（前掲論文）、こうした分家の場合には「別有家譜」と記され、その例は数多い。逆に李保姓・葛孫姓などのように分家家譜のないものもある。八重山家譜の総数を把握するには、家譜の蒐集ならびに現存家譜の綿密な分析がなされねばならないが、これも今後の課題である。また現存家譜の実物がすべて拝見できるわけではなく、複写にたよることが多く、そこからくる問題もある。特に八重山家譜には、後述する糺合があり、その糺合人の印鑑が複写家譜では不鮮明の場合があり、人物比定の困難さがある。

この小論は、こうした制限された状況での覚書きであることを、初めにお断りしたい。以下、八重山家譜の編成、津波による流失と再編成を中心に論をすすめる。家譜を歴史資料として、今後活用していくための位置づけを試みてみたい。

二、家譜の編成

沖縄本島における家譜編集は、上士の間では順治七年（一六五〇）頃から進行し、羽地朝秀の時代（一六七〇年前後）に中間層以下の士族に対し系図作成が命ぜられたと考えられている（前掲、田名論文）。その後、康熙二八年（一六八九）には、御系図奉行が置かれ、翌年御系図中取が設置された（琉球国旧記）。『琉球国旧記』官職部には、御系図奉行（称総宗司）。王子一員。按司一員。親方一員或二員とあり、康熙二十八年己巳。十二月二十六日。尚氏東風平王子朝春・向氏読谷山按司朝易・毛氏識名親方安依。始授御系図奉行職」と記す。さらに「時令群臣。各修家譜二部。一部蔵御系図座。一部押御朱印。以為頒賜焉。各為伝家之至宝。從此。按司・親方。或二三年交代。或四五年交代。今限年。冬交代」と家譜の格護、按司・親方の任期が規定されている。この本格的家譜編集によって、田名氏は高良倉吉氏の論証をふまえて、「王府の士族統制のあり様は、古琉球の一回性の効用しか持ちえない辞令書による統制から家譜へと移っていくのである」と指摘している（前掲論文）。八重山の家譜編集は、王府の本格的編集から四〇年後の雍正七年（一七二九）に許可されている。その指令は『参遣状』（乾隆一八年条）に、雍正七年十一月の「覚」としてみえる。長いが全文引用する。

(1) 覚

一、両先嶋、頭以下系図無之付而、子孫代数を経候得者、先祖令忘却、本宗外戚之親族ハ猶以致忘行、剩御高恩之官爵忘却仕候儀、残念至極事候間、系図家譜仕立候儀、御免被下度旨、此節両嶋頭願出趣有之、誠忠儀孝行之心底神妙之事候、依之、右之趣達上聴、弥願之通系

図家譜仕立之儀、差免候条相仕立、子孫永々相伝可_レ有之事

一、氏之儀、二字氏限り可相用候、尤一門中者、氏并名乗頭字同字可_レ致事

附、唐名_者用候場所無_レ之候間、無用可_二申付_一候

一、在番人、彼嶋之女_ニ取合儲置候子共_ハ、於_二御当地_一茂直父之系_ニ継入候儀、御免候間、其身一代

諸役人嫡子次男並_ニ、上納方并追立夫可_二差免_一事

一、士流人、彼嶋之女_ニ取合儲置候子共_モ、直父之系_ニ継入候儀、御免候得共、流人之子_ニ而格別

之事候間、御当地田舎居住並_ニ百姓同前可_二召仕_一事

一、おいか人たりといふとも、脇腹_ニ相求候子_者、百姓同前可_二召仕_一候、尤継子無_レ之者_者、訟之

旨_ニまかせ可_レ令_二用捨_一旨、先年申渡置候処、其以後脇腹_ニ生産之子共_モ法度相背、直父又ハ一門方

江掠入、筆算素立仕候由相聞得候、此儀畢竟猥_ケ間敷風儀、殊_ニ筆算稽古之者多罷成候儀、專百

姓困窮之基候条、此節入念稠敷可_二相糺_一事

右達_ニ上聞_一申渡候条、堅固奉_レ得_二其意_一候様、此節而先嶋江屹可_二申渡_一者也

雍正七年己酉十一月七日 評定所

御物奉行

右之通被仰出候条、可_レ得_二其意_一候、以上

酉十一月十五日 安里親雲上 大城親方

在番頭

(2) 覚

両先嶋頭以下之者江、系図家譜仕立候儀、御免被_ニ成下_ニ度旨、今度渡合之両先嶋頭願出趣有之、願之通系禄〔萬書付集〕では「系図」とある仕立之儀被_ニ召免_ニ、別紙御評定所御書付一通、此節帰嶋之頭宮良親雲上江相渡差越候条、具_ニ得_ニ其意_ニ嶋中堅固可_ニ申渡_ニ候、以上

酉十一月十五日 安里親雲上 大城親方

八重山嶋
在番

(1)の「覚」は『球陽』尚敬王十七年条にも同内容だが「始許宮古八重山役人纂修家譜及賜用覆姓」(第一・二条)、「始免宮古八重山在番生子賦税夫役」(第三・四・五条)の題で区分している。これによつて家譜仕立申請の内容がわかり、さらに氏名^{うじな}は二字を使用すること、名乗字は一門中は同じ字を用いること、また唐名は使用する場がないので付けないこと、などが指令されたのである。ここにも両先島が沖縄本島とは区別されていることがわかる。ところで、この(1)(2)の「覚」の指令によると、この年に王府に到った両先島の頭が家譜仕立の申請をしたわけだが、「長栄姓大宗家譜」の序にはそれ以前に二回、家譜纂修の申請をしていることが記されている。序には「尚敬王代康熙五十二年(一七一三)

癸己在番奥武親雲上、雍正三年（一七二五）乙巳在番当銘親雲上之時、本嶋役人等題請纂修家譜之事」と八重山の役人等の申請があつたにもかかわらず、理由は不明だが不許可となっている（同内容の記録が「山陽姓大宗家譜序」にもある）。この二回の記事は『参遣状』が欠年のため傍証することが出来ない。前引の序文は続けて、「至于（雍正）七年己酉、山陽氏宮良親雲上長亮、朝貢入中山亦乞籲陳奏前事、幸蒙俞」といい、「上官姓家譜序」には「雍正七年、吾幸奉年貢随頭目山陽姓長亮、到中山府因公之暇与宮古嶋官吏會議、以兩嶋登仕藉者之裔孫皆修家譜之情一齊具奏、恭奉王上恩准其請即賜」と宮古島頭との會議を以って、協同しての申請となった。前二回の申請が八重山のものか不明だが、ここによりやく家譜仕立が許可された。雍正七年に両先島の協議で申請がなされたことは、宮古島の「白川氏家譜序」にもみえる。ちなみに山陽姓長亮は「山陽姓大宗家譜」の四世で、康熙四九年（一七一〇）に宮良頭職に任じ、以後朝貢物宰領の出府は、同五〇年・五四年・五七年・六〇年・雍正三年・七年の六回に及ぶ。彼の八重山の家譜仕立申請の功績は同家譜所収の同治十一年（一八七二）に山陽氏一門中が提出した元祖の勲功を記す口上覚でも特記されている。

家譜仕立の許可は出たが、家譜記載の方法など習熟せず、ために李保姓二世喜充（若文子、川平仁也）は乾隆十五年（一七五〇）に、系図家譜齊法稽古のため王府に行き、系図座でその法を伝授され、同年冬に帰島している（「李保姓大宗家譜」）。その条に雍正七年の家譜仕立免許のことを述べたのち、「雖然其調法不知、数十年無有家譜、因是回嶋之後、尽力諸士系図紀錄取捌為家譜從茲始也」と記し

ている。彼の実父は徳容姓波照間掟親雲上為長だが、李保姓大宗喜時に嗣子がなく、ために喜時の継子となった。従って、「岳昌姓小宗（四世致展）家譜」の「岳昌姓家譜世鑑序」（以下、岳昌姓家譜世鑑序と略す）にいう、譜法の「不知其道」、至乾隆十六年己未、徳容氏川平仁也、為到王府於御系図座「伝授下嶋」とあるのと同人物である。この乾隆十六年は、「李保姓大宗家譜」の乾隆十五年と違うが、「岳昌姓家譜世鑑序」は、大津波後の家譜再編成に多大な貢献をした致御の執筆に成るとはいえ、嘉慶二年（一八一六）に誌されたものであり、ここでは喜充本人の譜記に従い、十五年とするのが正しいであろう。彼の伝授されたものは、「編綴男女生年月日、冠嫁官爵勲功、及不禄年月日、道号、莫不載是譜矣」（「岳昌姓家譜世鑑序」と、ほぼ現存の家譜内容と同じものであったようである。しかし彼は乾隆十七年（一七五二）に死没した。その仕事は蔵元内の系図方で続行され、家譜仕立は許可後二〇年にして、ようやく軌道にのる。

しかし乾隆十五年以前にも家譜のいくつかは作成されている。上官姓家譜序は雍正七年（一七二九）、錦芳姓の由来記「慶来慶田城由来記」には、「雍正十壬子年（一七三二）より系録被下」とあり、長栄姓家譜序は雍正十一年に誌されている。この時期の作成家譜の原形態は未詳だが、あまり統一された記載内容ではなかったために、喜充の御系図座での譜法習得となり、その後は現存家譜とほぼ同内容となったのではないだろうか。しかし内容はともかく、家譜の形式が初めから現存家譜と同形式であったかとの点になると問題が残る。

田名真之氏は、久米村系家譜以外は、家譜成立期には和文であったものが、康熙三五年（一六九六）から漢文に引直す作業が始められ、書式も和系格から唐系格に変化したという。変化の時期は乾隆半ば頃（一八世紀後半）に規模が定められ、一九世紀、嘉慶の頃までに変更したと推測する（前掲論文）。この和系格の家譜は、八重山と同年に家譜仕立が許可された宮古島に多い。とすると両先島は共に同形式のものであったのが、八重山は天津波後の家譜再編成期に、その全てが現存家譜のような唐系格に改定されたのではなからうか。この点は後述したい。

家譜仕立により、以後は系持（士族）と無系（百姓）に区別される。このような状況を「慶来慶田城由来記」（安村家所蔵本）は次のように記している。

往古者、士者無之、百姓はかり罷居、右之内人柄相应之者共式三人頭立ニ而、ミおやたいり并村中彼是取払、わらさん（發算）ニ而仕来り、夫々墨算用ならひ稽古させ、次第々々相弁相勤、士之様ニ罷居、其子共まで右之素立仕、妾腹之子共まで同素立置候処、御在番奥武親雲上御定ニ、妾腹之子共ハ百姓ニ召成、追立夫遣仕申付置候、其後雍正拾壬子年ハ系録被下、筆算人ハ蒙仰候得共、百姓並ニ帳面ニ（童）わらへ名書来り、又乾隆式拾六巳年改帳ハ士ニ召成、何かしにや与書出申候処、同二拾九申年ニ、御国元之新参士並ニ元服仕日ハ、青八巻頂戴被下、冥加至極不浅御事候

この錦芳姓は、大宗用緒以後、代々役人を勤めたが、ここに言う筆算人の呼称も、童名を書いていたのを乾隆二六年（一七六一）の手札改帳から士となり、何某仁也と称し、同二九年には青八巻を冠す

ることとなった。乾隆二九年の指令は、『参遣状』所載の同年四月二八日付の八重山頭三名連署口上覚をうけて、十月十五日に出されている。そこでも、「氏名乗家譜」が許されている筆算人は百姓と諸事別格だという。八重山の系持は、ほぼ次の四つに分けられる。⁽⁴⁾①オヤケ赤蜂時代に中山(首里)王府に忠誠を誓った豪族とその子孫、②なんらかの功労があった徳望家とその子孫、③在番ならびに検使(王府より派遣の役人)などの妾腹の子孫、④その他、である。①は土着の有力な一門を形成し、『八重山歴史』附録の八重山頭職一覧表九五人のうち、長栄姓一七人、山陽姓一六人、嘉善姓一人、松茂姓七人、錦芳姓六人などはこれに属する。③は近世中期頃から勢力を伸ばし、梅公姓六人、夏林姓五人、毛裔姓四人などの頭職を出しており、一門数では約半分を占める。

ところで、系図方(系図座とも)⁽⁵⁾には「系図座公事帳」があり、業務はそれに則って行なわれる。不法があれば厳科に処せられ⁽⁶⁾(富川親方八重山嶋規模帳)、逆にその重要さで星功は余計に計算されている⁽⁷⁾(八重山島蔵元公事帳)。役人は首里大屋子より二人、筆者一人、定加勢一人であったが、咸豊七年(一八五七)に定加勢一人を増やし⁽⁸⁾、同治十三年(一八七四)には定加勢四人を四箇村より一人づつ出させている。⁽⁹⁾

三、津波と家譜再編成

乾隆三十六年(一七七二)三月十日に石垣島を襲った未曾有の大津波(明和の大津波)は、死亡行方不明

者九、三一三人（当時の八重山群島人口の三二・二三％）・住家流失二、一七六戸・畑流失一、五八五町余・田流失五六町余・全潰村八村・半潰村七村、貢納米・所遣穀・二度夫賃米は一、二二三石余の流失、その他の被害は惨烈をきわめた⁽¹⁰⁾（「大波之時各村之形行書」、以下「形行書」と略す）。とりわけ蔵元ならびに役座・仮屋・桃林寺・権現宮などの流失、役人では在番・頭二人・惣横目三人・首里大屋子二人・与人八人・蔵筆者三人・目差九人・若文子一人・耕作筆者一九人・杣山筆者二〇人・仮若文子九人・惣横目仮筆者一人、計八八人の溺死者を出したことは、津波後の処置と行政に多大な困難をもたらした。

蔵元の流失は、「御高札並萬御条目、諸御手形、諸帳冊」の流失となり、同年三月二七日に貢納米を運ぶ馬艦船が一隻入港したので、同船により大津波の次第、村々惣絵図ならびに諸事取メをとりそえ、在番筆者翁長筑親雲上を遣わし、附役桃原与人・玻座真目差、さらに国元控の諸帳冊書写のため、桴海村杣山筆者山城仁屋・伊原間村杣山筆者大浜仁屋・仮若文子亀川仁屋を王府に派遣した（形行書）。王府は祭文使者として源河親雲上・名城筑登之親雲上を派遣した。翁長筑親雲上は上国後病氣となり、後役の座波里之子親雲上、溺死の在番金城親雲上の後役野国親雲上は、出府した桃原与人・玻座真目差らと五月十九日に到着した⁽¹¹⁾（形行書）。諸帳冊書写役三人の帰島は未詳だが、九月十一日に「諸座道具帳」の写しが下されている⁽¹²⁾。出府した玻座真目差は山陽姓六世長矩で（山陽姓小宗（五世長良）家譜）、本人の譜記では馬艦船頭屋比久船に乗り四月十一日石垣を出帆、同二二日那覇上着、

御届も首尾よくすみ、王府の御祭文御使者源河親雲上乘船の案内者を仰せつけられ、五月二七日那覇出船し、六月一日帰島した。

申請の高札などは、「乾隆三十七年御手形写」に次のようにみえる。

覚

一、御高札五枚

一、御国元御副札壹枚

一、御当地御副札壹枚

一、宮古嶋江相渡被置候異国方御條書写七冊

一、同書付写壹枚

右者其嶋去年三月大波上り候時、御高札其外諸帳致ニ流失ニ候由被申越候紙面遂披露、右之通り此節御物奉行方江相渡差越候間、可被請取候、以上

辰三月十一日 久 志親雲上

徳 嶺親雲上

津嘉山親雲上

八重山嶋

在 番

覚

一、御高札五枚

一、御国元御副札壹枚

一、御当地御副札壹枚

一、異国方御條書写七冊

一、同書付写壹枚

右者八重山嶋去年大波上リ候時、致_ニ流失_一候由申来候付、此節差越候間、渡方可被申渡候、以上

辰三月

久志親雲上

御物奉行

右在番筆者慶田筑親雲上⁽¹³⁾江相渡差越候、此段致問合候、以上

辰三月廿日

美里親雲上

高宮城親方

八重山嶋

在番

こうして島津ならびに首里王府からの高札・副札などは再交付されたが、前記三人の書写目的は別の諸帳冊（参遣状や手形写あるいは前記の蔵元の業務上の帳冊など）にあったのではあるまいか。また小論

の問題とする家譜に関しては、系持の集中する四箇村（登野城・大川・石垣・新川の四村）が半潰村であり、石垣島の南側からの波では「宮島御嶽前（現在の四号線）並坂下り東西村長通被引流」（形行書）の状況であり、系持居住地のほとんどが波で洗われる状態であったとみられる。「公所破崩、家譜皆流失」（岳昌姓家譜世鑑序）の記事はあながち誇張ではあるまい。

しかし全ての記録類が流失したのではない。たとえば「南島」第一輯所収の「八重山島諸記帳」奥書には、

右由来記蔵格護之儀、乾隆三十六卯年大波揚致流失候付、山陽氏大川与人所持之七冊書写させ格護申渡候、以上

未十二月十日 宮良親雲上 石垣親雲上

大浜親雲上 饒平名筑親雲上

玻名城筑親雲上 屋嘉部親雲上

とある。この年は在番・在番筆者の署名から乾隆四〇年（一七七五）である。同文・同日の奥書は「南島」所収の「八重山島由来記」（これには在番・同筆者名を欠く）、「宮古八重山両島絵図帳」の八重山分（浦崎浩行氏蔵）に見える（これには在番名を欠く）。浦崎家所蔵の絵図帳は、まさにこの時書写の原本で、綴目毎に黒印を捺し、頭三人・在番筆者二人の印がある（在番名のある最末葉は後に欠落したと思われる）。書写の七冊とは前記三種類を含めたものであるう。

流失した家譜の再編成は、乾隆四一年（一七七六）着任の在番有銘親雲上の時に始まる。その後の経過は「岳昌姓家譜世鑑序」に詳しく、喜舎場永珣氏もその大要を紹介し、宮良高弘氏も概当部分の原文紹介をしているが脱落などがある。長文ながらその部分を引用する。

（上略）夫至乾隆四十一年丙申、監守有銘親雲上承詔下嶋、諸人系図家譜編綴相糺、可呈上君王旨被命、立諸官員雖為相糺、其法不正糺人為第一呈上王府置也。皆本嶋嵯年餓死者不可計數、殊無紙而喪紙編綴驗焉也。以来曆日符驗不載譜也、至嘉慶十四年己巳、嶋官長錦芳氏用致・山陽氏長友・同氏長演評

議、相糺如旧本不可不置編綴、立其役也。附明紹氏長榮・憲章氏英良・夏林氏賢則・憲章氏英揚從己巳至

于歲次壬申四箇年、可出編綴旨、雖三百舐達未曾出、焉絶機心。長榮任石垣頭職、英暢為小浜與人二

首里大屋子、賢則西表首里大屋子、當剛為宮良目差嘉慶十八年癸酉賢則任宮良頭職、長榮與長演評論、再興起立其役。附前英良、

首里大屋子當演・葛孫氏大川目差秀永・梅公氏若文子石垣仁也孫公・葛孫氏若文子玉代勢仁也秀嘉・岳昌氏黑嶋仁也致御・順天氏黑嶋仁也直賢予再被選舉、思不可不心勞、出謀免慮謂

官長云、程久雖廻書、何曾不出諸士、可一会旨預告鄉里長者、日限到来村々巡而、於

目前加指引、不執符書謂不敢不出此理可也、如此執符書從諸士、家譜、是自己忠孝錄也、

而速所可出編綴、其規模不知云如何、然則登野城・大川・平得・大浜四箇村、從習順天直賢、

石垣・新川・川平・古見・上原・西表六箇村、從習致御、言可編綴歡喜、而後有令見綴者、

正之、不使見綴者執筆與之、至歲次甲戌季秋、總而聚執糺方未成焉、予冬十月朔日為大

川村杣山筆者、糺方延引焉、又歲次乙亥冬、三被舉糺役、

附山陽氏西表首里大屋子長勝・松茂氏黑嶋首里大屋子當演・錦芳氏惣横目真謝與人用恩・益茂氏同役登野城

与人里雄・大史氏惣横目筆者大浜仁也高備・長興氏惣横目、從_二乙亥冬_一至_三歲次丙子仲夏_二紵竣矣、然譜法不一規、順_レ飯筆者村山仁也善道・順天氏黒嶋仁也直賢・岳昌氏致御也

理者少、逆_レ理者多、呈上訟其法定一模清写置焉矣、予其功深切、今人鑑之、今之人不鑑之、又後之人鑑之、後之人不鑑之、又後之人鑑之矣、

皆

嘉慶二十一年十二月 七世致御_(謹誌)□□焉

本嶋官

山陽氏大浜親雲上長演・長栄氏石垣親雲上真保・山陽氏宮良親雲上長宣

同監守

兼本親雲上朝白_(盛)・森松筑登之親雲上長_(脱アルカ)・親泊筑登之親雲上

すなわち乾隆四一年(一七七六)の家譜再編成は、王府の指令で委員を任命してなされたが、一部分しか出来なかった。次いで嘉慶十四年(一八〇九)に頭三人の評議で八名を任命し、四カ年での完成を期したが成らず。理由は転任者死亡者の続出による。さらに嘉慶十八年(一八一三)夏林氏賢則の宮良頭職就任(現存の辞令書によれば十七年四月一日が正しい)により、前回時以来の大浜頭職長演・前回時の委員であった石垣頭職長栄と図り七名を任じた。再び任命された岳昌姓致御は、編纂の具体的方法を訴え、四カ村を順天氏直賢、六カ村を致御の分担とし、編綴されたものは糺し、編綴できないものは執筆した。こうして翌十九年秋には全ての素案があつまったが糺すまでには至らない。理由は致御の

大川村杣山筆者転任による。翌二〇年、三度糺役八名が任命され、同年冬から翌二一年五月に糺すことは完了した。しかし譜法は一定しておらず、清書が必要であったという。三度まで糺役を勤めた岳昌姓致御の困難さがわかる。⁽¹⁵⁾

ここに家譜再編成時のいくつかの問題が指摘できよう。(1)王府の指令により、頭職が実際に指揮していること、(2)委員が任命されていること、(3)編成家譜に年次差のあること、(4)編綴すべき該当者に面接すること、(5)素案を作成し、それを糺すこと、(6)史資料を提出させていること、(7)該当者の居住村は一〇カ村と老えられていること、などである。

以下、これらのうち主として、(3)(5)(6)について検討してみたい。

現存家譜に家譜組立て年月日の奥書を有するものが、いくつかある。二つ紹介する。一つは「大史姓大宗家譜」素案⁽¹⁶⁾の奥書である。

右私系図組立如斯御座候、以上

申十二月十五日

故真栄里目差子

ミつき

右通相違無御座候 以上

申十二月十五日

一門又吉筑登之子

大浜よや

同仮若文字

宮良よや

同耕作筆者

嶋袋よや

同杣山筆者

与世山よや

故真栄里目差は八世高政で、乾隆三六年（一七七一）死没。その子で家譜を申請した「ミつき」は九世高友の童名「満慶山」である。高友は乾隆二八年（一七六三）生れ、同四三年（一七七八）元服し、西表仁也と称する。従って家譜申請の「申」年は、元服二年前の乾隆四一年である。この年は前にみた在番有銘親雲上の家譜再編成時に当り、再編の最も早いものに属する。素案は更に朱筆による用語の訂正、記事の補充がなされたが、すぐ家譜成稿とはなっていない。奥書の次に高友の譜記（嘉慶九年△一八〇四△の書付けまで）、十世高初の譜記（嘉慶十二年△一八〇七△までの二葉があり、系図方での成稿家譜は、大宗からこれらの記事までを同一筆で書き、その後を書きついでいる。従って家譜組立て申請から系図方での成稿までには、相当な日時が経過している。これは前にみた糺役などの変動などに原因するものであろう。系図方での三度の糺合が糺筆者（この場合は四人）による読と請でなされ、正本が完成している。糺合については後述したいが、同四人になる糺合家譜は他に、「山陽姓小宗（五

世長京)家譜」「上官姓小宗(六世正儀)家譜」があり、同時期の完成と思われる。

二つは「長栄姓大宗家譜」(那覇市史編集室蔵本)である。

右通組立差出申候間、御調部方被仰付可被下候、以上

長栄氏

戊閏二月

川平目差㊦

右通相違無御座候、以上、

一門新川村杣山筆者

戊ノ閏二月

宮良よや㊦

同

崎山与人㊦

同

桴海与人㊦

同登野城耕作筆者

大浜よや㊦

同

石垣目差㊦

親類前

石垣親雲上㊦

この「戊閏二月」は嘉慶十九年（一八一四）である（暦は中国暦）。申請者の川平目差は十一世真昌で、嘉慶十六年川平目差となり、道光元年（一八二一）に与那国目差に転役。この家譜に川平目差は彼のみなので、嘉慶十九年の年次は動かない。同年月の奥書が同じく「長栄姓小宗（十世真孝）家譜」にもある。

右通組立差出申候間、御調部方被仰付可被下候、以上

長栄姓

戊閏二月

崎山与人

右通相違無御座候、以上

一門新川村杣山筆者

戊閏二月

宮良まや㊦

同

川平目差㊦

親類前

石垣親雲上

この小宗家譜の祖、真孝は嘉慶十五年（一八一〇）に崎山与人となり、同二三年死没。真孝は前記家譜申請者真昌の叔父に当り、分家しての家譜組立てである。両家譜組立てに際し、両者はそれぞれの一門連署者に名をつらねている。家譜奥書には、申請者個人名だけのものもあるが（「孟功姓大宗家譜」）、多くは一門の重立った人々が連署している。

組立てられた家譜素案は、前の大史姓家譜の場合のように加除訂正（糺方）が行なわれ、正本完成となる。

家譜を歴史の史資料として活用していくためには、その厳密な史料批判がなされなければならないことは言うまでもない。そのためには、譜記の逐条にその裏付けが必要なわけだが、史資料の残存状況によりその作業も大部分は困難である。ここでは八重山家譜全体として、その裏付けの可能性を考えてみたい。まず、大まかに大宗分類の①②③について概観しておきたい。

八重山の家譜における大宗で、最も初期の人々は、弘治十三年（一五〇〇）のオヤケアカハチの乱に、首里王府に与した人物と次代の者である。錦芳姓用緒・長栄姓信保・山陽姓長光らである。これらは前記の宮良高弘氏の大宗分類①に属し、その由来記事の内容は『球陽』や「八重山島由来記」に拠っていると思われる。しかしその後、家譜編成に至る期間の内容はあまり明確ではない。雍正十一年（一七三三）に長栄姓家譜序を誌した七世信周は、大宗信保の代より「至_レ今二百余年矣、子孫蕃衍代陞仕籍而家庭栄華矣、雖_レ然本嶋無_レ有_二家譜_一、故照穆已乱、長幼失序而祖宗功業不可得而知也」と

記している。事実、二世信休は「童名保久利盛、号建徳、行一、生寿不詳」で、母・室ともに「不知^レ為何人女」とあり、業績も「弘治年間任大城与人職、歷年久遠官級位階不詳」である。三世信有・四世信名もほぼ同様。五世信行に至り、「童名祖良広、号宝岩、行一、万曆十七年己丑生、崇禎十三年庚辰五月廿五日卒、享年五十二」と具体的になるが、母は憲章氏としか見えず、室は氏名は分明だが生寿は不詳。業績も「暦年久遠官級位階不詳」ながら三カ条については年次が明確である。六世信明からはほぼ明確である。しかし同世代を大宗とする山陽姓大宗家譜は、一世長光の父母・室・継室の生寿年月日は不詳ながら、本人の生寿ならびに業績はかなり明確であり、二世以降もほぼ明確である。雍正七年（一七二九）に六世正方が序文を誌した上官姓家譜は、五世正則は明瞭だが上の世代に遡ると次第に不明さが目立つ。

大宗の②のグループでは、大史姓大宗家譜の一世高教は父母・室・生寿年月日・官級ともに不詳。二世高集も母・室・生寿年月日・官級ともに不詳。三世高起に至り卒年月日は明瞭だが、母・室・官級ともに不明。四世高根で生寿年月日、室は明らかだが、母・官級はやはり不詳である。五世高康以降は明瞭となる。多田氏の場合は、一世督崇の生寿も明確で、「多田大阿母勲功之以由緒、康熙六十年（一七二二）辛丑七月呈請入土籍」とその来歴を記している。

大宗が③のグループは、近世期に首里王府派遣の役人らの子孫であるため、かなり明確である。

この概観は、再編成後の現存家譜をもとにしてのものであり、原家譜流失が不分明の原因となるこ

ともある。たとえば「憲章姓小宗（三世英政）家譜」英政の項に、「童名樽、号瑞雲、行二、前已所修之家譜者、乾隆三十六年^{辛卯}三月十一日有地震陡海水漲漫之時流失矣、故生寿年月日于^レ今不^レ可^レ考故略焉」と記す如きである。

家譜の不明きは、家譜編纂時を遡及するに従い不明瞭にならざるを得ないことは致し方なく、それ故にこそ家譜編纂許可時の言辞にも先祖の代数をただし、前代の功業を忘却することのないよう子孫に伝え、家宝とする旨を誌したのである。津波による完成した家譜の流失はそれを烏有に帰し、再編成は前にみたように多大な困難をはらってなされた。しかし流失をまぬがれた家譜もあり、その場合の再編家譜はそれをもとに組立てられたと考えられる。「上官姓小宗（六世正儀）家譜」（蔵元格護本）は奥書によると、「戊正月」に「耕作筆者故大浜よや嫡子、黒嶋よや」が組立て、申請したもので、申請者は十世正演、年次は嘉慶十九年（一八一四）である。この家譜の糺合人の記載面には次の文言がある。

（本系図）

并日記

引当

杣山筆者

古見よや[㊦]

同

真謝与人[㊦]

続いて三度の読と請による糺合人の署名がある。同様の文言は「山陽姓小宗（五世長京）家譜」「長栄姓大宗家譜」「長興姓小宗（二世善方）家譜」「梅公姓小宗（四世孫俊）家譜」にもみられるが、この文言の

署名人はこの二人に西表首里大屋子を加えた三人(古見よや以外は一人を欠くことがある)である。彼らは「岳昌姓家譜世鑑序」に表われた嘉慶二〇年(一八一五)に三度目の糾役が選ばれた際の、山陽氏西表首里大屋子長勝・錦芳氏惣横目真謝与人用恩であろう。この「本系図」とは、津波以前成立の原家譜である(長栄姓大宗家譜の同文言から本家の家譜ではない)。「日記」は「系図方日記」と思われる(二六〇頁参照)。この文言記載のものは、管見では上記五種のみであるが、原家譜の存在するものはそれを基本とし、さらに日記をも引当て、そのうえ糾合がなされての再編成であったと思われる。

また原家譜があるにもかかわらず、この「上官姓小宗(六世正儀)家譜」が、小宗六世正儀から申請者(十世正演)の譜記、嘉慶十八年(一八一三)までが同一筆で書かれていること(それに続く道光七年△一八二七△から異筆)は、この家譜が全く新しく作成し直されたことを示している。それは譜法の改正を意味するものであろう。前に田名氏が和系格から唐系格への変化を指摘されたことにふれ、また家譜再編時に「譜法不一規」(岳昌姓家譜世鑑序)との状況であったことも述べたが、それらはここにみた「本(原)系図」から新系図作成の移行時にあらわれた現象であろう。存在した原系図に仕次するのを基本とすべきものを改めて作成し直す煩雑さをいとわず、「呈上訟、其法定一模清写置焉矣」(岳昌姓家譜世鑑序)との措置をとったのである。

現存する「長栄姓大宗家譜」初期世代の不分明さを前に述べたが、それは津波による影響ではなく、原家譜組立て以来のものであったし、その他の家譜もほぼ同様であろう。

家譜の記載事項について全てを裏付けることは不可能だが、活用すべき資料には、まず(1)勤書、(2)御手形写などがあげられる。

役務昇進の基本が勤星にあったため、その点検は厳密を期した。同治十三年(一八七四)の富川親方の「八重山嶋蔵元公事帳」の規定では、次のようである。勤星は毎日星帳に各座の役人が印を捺し、毎月朔日に差出すとよく調べたうえ、月々に在番印を捺して渡す。一年中の勤星帳は次年正月十日限りに差出し清書調べのうえ勘定座へ提出する。そこで星勘定がすむと在番頭の奥書をもって惣横目に渡す。諸役人以下若文子・杣山筆者・耕作筆者までのものは清書し、在番頭連名印判を捺し、上国の蔵筆者に渡す。原本は蔵元に格護し各人の「勤書」に仕次する。⁽¹⁷⁾勤星の取々に疎略により間違いが生じた場合、本人は三〇日、蔵筆者は二〇日の寺入に科せられる。この「勤書」は頭以下の諸役人で親子とも役儀を勤めると各人別に「勤書」を作成する。嫡子でも親が勤役中は一緒にしない規定である。「勤書」の仕次は、以前は五・六年、あるいは七・八年も経過してされたこともあったが、「勲功調部方之儀、大切成事」なので、道光二八年(一八四八)には、毎年仕次するよう布達された。もし支障があり当年勤めの仕次が出来ない場合には、その旨訴え出で、在番頭の次書をもって王府へ問合せのうえ、翌年限りに仕次することとの規定である。なお蔵元の諸座公事帳にはそれぞれ「勤星取立之事」が記されている。

「勤書」の分析は従来全くなされず、史料としての扱いも皆無である。そして「勤書」は家譜に比

較して現存するものが少ない。体裁は仮綴で、表紙中央上部に勤書と書き、その左下部に当人の氏名・個人名を誌す。第一葉冒頭に大宗より当人に至る主たる世代を明記し、「勤書」作成時の当人の年齢・役職名・個人名を誌す。以下、一年間の勤役ごとにその期間月日・勤日数・褒状などを書きついでいく。「勤書」の最末葉の奥書にはその作成時の在番・在番筆者・頭職三人が連署捺印するのを原則とする。嘉善姓石垣よやの場合は、乾隆六一年（一七九六）に当歳三〇、杣山筆者の時作成された。奥書には、

右勤之次第相違無御座候、以上

辰四月

八重山嶋頭

大浜親雲上

同

宮良親雲上④

同

石垣親雲上④

同在番筆者

我喜屋筑登之親雲上

同

宮城里之子親雲上[㊤]

右見届差登申候、以上

同在番

辰四月

奥川親雲上[㊤]

とある。「辰四月」はこの在番・同筆者の任期から作成と同年である。彼の場合は、乾隆四八年（一七八三）から勤役し始め、乾隆六〇年十二月二五日に高那村杣山筆者となり、その翌年に作成された。そのためこの期間の記事を本文より一段下げて年毎に個条書きにしている。そして作成年の記載は、次のようである。

己年大浜親雲上仕次[㊤]

一、嘉慶元辰年杣山方種々勤、六月朔日より十二月卅日まで、勤日数貳百七日[㊤]

ノ星貳百七日

以下同様に一年間の勤役日数に確認印を捺し、翌年の勤書への仕次も責任者名と捺印を明らかにし、役務の就任・転役をも記している。そして順次葉数を増やしていく。

奥書の文言・書式・作成時の署名というのは、他の「勤書」も同様で、将来にいたる勤役日数などの証明は、前にみた蔵元内の業務として継続されていくことになる。しかし「勤書」の記載内容には原則として変化はないが、道光年間作成のものなどには日数確認印や、仕次責任者名がなく、個条書きことの冒頭に捺印するだけのことが多い。こうして毎年仕次された勤書をも資料とし、五年毎の家

譜仕次の際、家譜に記載すべき個人の該当記事が譜記されたと思われる。ここでの記載すべき記事とは、「勤書」記載の官級・功績を指すが、いま便宜、山陽姓黒島仁屋長房の「勤書」と譜記を対比させてみたい。長房は「山陽姓小宗（六世長敏）家譜」の九世である。「勤書」は道光十五年（一八三五）に当歳三六、真栄里目差の時作成された。この「勤書」は前半に祖父長周・父長保の譜記（官級・功績）を載せ、その後に書きついでいる。長房は嘉慶十七年（一八一七）から勤役し、勤書作成時の道光十五年までの勤役などは作成時に在番以下の連署で承認されているので、個条ごとの印がなく、翌十六年からは個条冒頭ごとに捺印している。長房の「勤書」分は三五葉に及び詳細で、家譜の譜記は十三葉である。両書は性格が異なるので当然である。「勤書」の官級はすべて譜記と同一だが、褒状など本来の文書形式のもの（家譜には普通お家流の草書体で収められる）は、「勤書」には十二通あるが譜記には八通しか収載されていない。収載しなかった四通のうち、三通は褒状、一通は辞令書である。辞令書は道光二年（一八四一）の大地方大浜間切杣山耕作下知役で、譜記には「同年大地方大浜間切下知役」と記されるが、他の三通の褒賞については譜記の記載が見当らず、如何なる理由か未詳。

上官姓宮良仁屋正勝の「勤書」は、道光二年（一八四一）に当歳二六、仲間村杣山筆者の時に作成されている。彼は道光十一年から勤役し、作成時までの年ごとの勤日数は同一筆で、次年から異筆で仕次されている。彼は「上官姓小宗（八世正浮）家譜」の十世で、譜記には道光八年の元服、同二〇年仲間村杣山筆者となり、咸豊二年死没の三条しかない。家譜に彼の事績を追うことは無理だが、「勤

書」では道光十一年に十六歳で勤役し、二年間は内横目、次いで三年間の御用布取納加勢、さらに五年間の馬筆者を勤め、道光二〇年に仲間村杣山筆者となった。以後道光三〇年まで同役を勤め、翌々年に死没した。

以上、簡略ながら「勤書」の概略・内容にふれてみた。これまで等閑視されてきたこの史料の蒐集が進めば、勤役の内容がさらに具体的に追求できるであろう。さらに家譜との照合が可能となり、近世史資料の欠如を補いうるものである。

次に家譜記載事項の裏付けとして、「御手形写」などについてふれてみたい。八重山の年代記には「八重山島年来記」⁽¹⁹⁾などがあり、より具体的内容をもつのに「参遣状」「御手形写」「萬書付集」などの史料がある。「参遣状」は康熙二五年（一六八六）から乾隆三〇年（一七六五）までの蔵元からの上申書と王府からの指令を載せているが、現存の三冊には欠年が多い。「御手形写」の原本は乾隆三六年（一七七二）九月から十二月、三七年・三九年五月より九月、道光十五年（一八三五）・十八年のものがある。別に「御手形写」より抜書きしたものが、乾隆三六年から光緒四年（一八七八）までである（ただし、これも欠年が多い）。「萬書付集」は、康熙年中・雍正八年（一七三〇）から十二年・乾隆十五年（一七五〇）から三十一年までの抜書きしたものである。従って相互に重複記事があり、抜書きのため記事の選択による脱落はやむをえない。特に当面問題にする個人に関する事項は脱落する可能性は大きいが、「御手形写」の原本から譜記に関する内容にふれてみたい。

「御手形写」の内容は、蔵元からの口上覚、王府からの指令、役人の転役、昇階、褒状など多岐にわたって記されている。いくつか例示したい。

①「乾隆三十六年御手形写」

(上略)

大地宮良間切宮良・白保・桃里・伊原間・安良・平久保・野底七ヶ村右同(杣山耕作下知役のこと)
伊原間与人・登野城目差石垣よや相果候付代

宮良与人

新川目差

石垣よや

(中略)

右之通申付候間、此段可被申渡候、以上

卯九月

知念親雲上

識名親方

八重山嶋

在番

②「乾隆三十七年御手形写」

言上写

一、請八重山嶋鳩間与人

真栄里与人

一、請同嶋真栄里与人

鳩間与人

一、請同嶋上原与人

崎山与人

一、請同嶋崎山与人

上原与人

右鳩間村・上原村噺役之儀、与人・目差共及老躰、何角差支候儀共有之候間、繰替被仰付度旨、在番頭申越候段御物奉行申出候付、右通被仰付下度奉存候事、

以上

御評定所筆者

辰八月廿五日 外間筑登之親雲上 金城里之子親雲上

③「乾隆三十七年御手形写」

言上写

一、請勢頭座敷

八重山嶋惣横目

川平与人

同嶋
波照間首里大屋子

同嶋

西表首里大屋子

一、請黄八卷

同嶋

新城与人

同嶋
宮良与人

(中略)

以上

御評定所筆者

辰八月廿五日 外間筑登之親雲上 金城里之子親雲上

④「乾隆三十九年御手形写」

(六月)
同十三日乙未 晴、天風己未之間

一、文林氏大川村耕作筆者故宮良よや、山陽氏平得村杣山筆者故大浜よや跡目被仰付度詔出相濟候事

附、書付系図(方略)(20)日記載

⑤「乾隆三十七年御手形写」

言上写

一、請階越ニ而勢頭座敷

一、綿子二把

大川与入

大浜筑登之

右去年三月十日地震有之、俄大波寄揚石垣四ヶ村并大地東方家屋人民被引流、在番頭を始、諸役
々末々之者迄太分致溺死候、然処諸木家材木ニ被覆、及半死候者も有之候、其節嶋中之者共、亦
々大波可揚哉与逃去、及半死候者共救方、又ハ溺死人取収候心入無之候処、右大浜事、幸ニ生揚其
様躰見及氣を付、無別条村々人夫呼寄、及半死候者共相救候働致下知方、且名蔵村上納米取
寄、石垣四ヶ村江致配分、飢餓相防セ、且沈壳物(穀)も潜揚粥飯焼、其場相働候者共江喰せ、且在番金
城親雲上行衛不相知ニ付、折角走廻死躰見出致葬礼、且在番筆者頭共公用ニ付離島江罷渡居候付、
早速右之段致問合、尤離々諸役并人夫可差渡段を茂申出候付、筆者・頭ハ次日罷渡、何角取計
方申付候内、小舟数十艘ニ役々人夫乗付罷渡候ニ付、何連(譜記では連)手分を以、及半死候者ハ療治を加、溺
死人ハ葬方申付候、右大浜事、其節妻ハ石垣ニ被覆相果、弟并男子致溺死行衛不相知、母ハ家ニ被

覆及半死候付、妹子共相合養生方相働候得共、其詮無之七日めニ相果候由、右通段ニ逢不幸歎入候折節、母養生掛而人命救方相働置候段、嶋中役ニ書付在番頭次書を以申越有之候、右式大變之最中、諸事取計方段ニ氣を付相働、別而殊勝之者御座候間、為御褒美右通被成下度奉存候事、

以上

御評定所

辰十月廿四日 永嶋筑登之雲上 金城里之子親雲上

⑥「道光十八年御手形写」

口上覚

乍恐申上候、私共事此節上国候処、当年者御冠船ニ付而諸御用筋差登候付、御加勢相働候様御自物方御筆者衆ニ被仰付、難有出精相勤置申候間、何卒似合之御取持被仰付被下度奉願候、此旨宜様御取成可被下儀奉頼候、以上

八重山嶋故名蔵与人子

同故西表目差次男

戌九月

池城ニや、

宮良ニや

本文先例勤星五百日被成下候処、此節ハ冠船御用差登、例年ハ諸書留相増候訳を以、勤星七百日被成下候間、其首尾方可被申渡候、以上

戌九月

翁長筑登之親雲上

棚原 親方

八重山しま

在番

こうした「御手形写」は、毎年次のものが本来蔵元に格護されていたはずであり、津波以前のものは流失したとも思われるが、それ以後のものはほぼ存在した（喜舎場家所蔵文書「御問合扣書」には明治二五年に、日帳方・仕上世座作成の年次毎の冊目録がある）。いま例示したものは、譜記との関連で摘記したが、譜記の内容と密接なかわりをもつことは了解されよう。そして逆にここにみえる個々の個人比定は、譜記から見る以外にない。

たとえば①の宮良与人は、「山陽姓小宗（五世長良）家譜」の六世長矩の譜記に、「同年（乾隆三六年）九月六日、大地方宮良間切杣山耕作下知役」とあるのに相当する（彼は同年五月七日に宮良与人となっている）。⑤の大川与人大浜筑登之は、「山陽姓小宗（三世長明）家譜」の六世長致で、乾隆三二年（一七六七）に筑登之となり、同三四年に大川与人となる。この言上写は津波時における彼の功績に対するもので、そのまま彼の譜記に記載されている。ただし最末尾の御評定所の永嶋・金城の署名が欠落している。⑥は「毛裔姓小宗（三世安核）家譜」の十世安暢の譜記にも記載されている。ただし次の相違がある。「御手形写」では池城よや（安暢のこと）と宮良よやの二人なので、口上覚の冒頭で、「私共事」とあるのを、譜記では池城よや一人で「私事」と記している。文書形式のものは、ふつうそのまま記載

されるのが原則だが、こうした例は稀だがある。また王府指令の傍線部分が譜記では脱落しているが、転記ミスなのであろう。

以上、家譜との関連で「勤書」と「御手形写」をみてきたが、これらの資料も家譜再編時に重要な役割を担ったことは首肯されよう。

さらに役務などに関連して王府側にもそれらの記録が存在したことが推測される。たとえば道光二年（一八四二）に御使者石原親雲上が八重山に派遣された時、御使者方御用を申し付けられた九人に対し、石原親雲上は道光二四年四月七日付でこの九人の勲功を御物奉行所へ上申した。これに対し道光二六年に次のような指令が出ている。⁽²¹⁾

本文遂披露候処、申出之通被仰付候、尤識名事、御使者方係リ之功御見合、去々年目差役江御付届相済、玉代勢・武嶋^{ニ者}外ニ掛勤有之、二重相成候間、御使者方江勤中者別勤之星御取揚不被仰付候、以上

午三月十日

垣花親雲上

翁長親方

八重山しま

在番

この識名は「長栄姓小宗（十世真孝）家譜」の十二世真章で、譜記では大川村杣山筆者から道光二四

年八月十七日に黒島目差に転じている。上申書に対して王府側が検討する場合、以前の記録がなければならぬ。こうした記録がどこまで遡及して存在したかは不明だが、津波による蔵元記録の流失に伴い、諸帳冊の筆写を命ぜられた内には、そうしたものも含まれていたのかも知れない。家譜再編成時にはそれらを含め、種々の史資料が活用されたと思われるが、そこに困難さがあり長期間にわたる原因ともなった。三度にわたり糺役を選び完成を期した労苦も推測されよう。さらに別表Ⅰ・Ⅱに示したように、ほぼ三度の読と請による糺合をもって再編成の家譜が完成したのである。一本は蔵元に、一本は家に格護した。

糺合人の署名は家譜表紙裏に記されている。そのため現存家譜には表紙欠落による不明もあるが、表Ⅰにみるように、ほぼ全家譜に糺合がなされたと思われる。糺合人は表Ⅱのように、系図方の役務者は勿論のこと、講談人・無役奉公人が多数動員されている。さらに糺合の、主として三度糺合に目差以上の役職者が加判しているのは、糺合の重要性を推測させる。

むすびにかえて

これまでも家譜が八重山の歴史資料として活用されてきたにもかかわらず、その全体的様相が解明されずにきた。この小論はその意味から家譜のかかえる限界性・資料性の位置づけを考えてみた。まだ残された問題も多いが今後の課題としたい。

そうした家譜の具体的考察から、歴史事象をより鮮明に描くことが可能となる。たとえば家譜記載褒状の多くに、村落再建に関するものが管見の家譜からでも三九事例をひろうことが出来る。時代は一七〇〇年代中期から一八〇〇年代中期に及ぶ。とりわけ大津波後の乾隆四〇・四一年（一七七五・六）の疫病流行の影響は大きく、二〇～三〇年後もなおって疲弊にあえいでいる。さらに道光一五～一七年（一八三五～三七）の麻疹流行、道光二三年の飢饉、咸豐三年（一八五三）の疫癘・飢饉と打続く災害に、諸村は疲弊した。

こうした時期に諸村の役人が、その嚆村で、いかなる勸農策をとったかを具体的に記し、かついか
に村の再建に尽力したかを申請することにより、相応の褒賞がなされ、それが家譜に記載されているのである。猪垣修補、疫癘流行時の人口減による放置田畠の明開、新田畠の開墾、種子の提供による
督励など、その方法は種々にわたる。また疲弊村の多くが、かつてのマリヤ有病地や離島に多いこ
とも注目すべきであろう。

家譜にみる褒賞記事は、もちろん個人の業績としてなされているのであるが、近世村落の問題は、
さらに当時の経済的問題として捉えなおし、深化させなければならない。個人の善行のみで基本的解
決がなされるものでもないし、役人層の経済基盤もさらに解明される必要がある。正史類は勿論だ
が、家譜の批判的活用が今後さらに望まれるところである。

注

- (1) 『八重山歴史』・『八重山古謡』など。
- (2) 「八重山群島の親族構造」(『東洋大学大学院紀要』第一集)、「八重山における一門の史的考察」(『社会と伝承』一卷三・四号)、「家系からみた沖縄の社会組織」(窪徳忠編『沖縄の社会と習俗』所収)、「婚姻と養子縁組からみた一門制度」『大史姓家譜』の分析から(『八重山文化』創刊号)、「沖縄八重山群島の一門制度」『大史姓家譜』の分析(『江上波夫教授古稀記念論文集 民族・文化篇』所収、など)。
- (3) 『那覇市史』資料篇、家譜資料(別冊。光緒二〇年(一八九四)の奥書があり、田名氏は一八六〇年代のものとする(前掲論文、注(72))。
- (4) 宮良高弘「家系からみた沖縄の社会組織」では、系持をこの①②③に分類し、宮地檀子氏は岳昌姓を④に位置づけている(前掲論文)。
- (5) 記録では注(6)(7)(8)のように系図方・系図座ともみえる。渡口真清氏のご教示では、両呼称に厳密な意での区別はなかったとのこと。ここでは便宜「系図方」としておく。また八重山の「系図座公事帳」の現存は未詳だが、梅公姓の平得村杣山筆者山里仁屋孫儀の「勤書」に、光緒四年(一八七八)に蔵元の諸帳を書写したことがみえる。その中に「系図方同(公事帳のこと) 老冊、枚ニノ三拾七枚」とある。
- 宮古の「系図座公事帳」の現存も未詳だが、宮古郷土史センター所蔵文書に「系図座公事帳より抜書」として二三一頁に紹介した「覚」が記されており、『平良市史』通史編には同公事帳の三条が紹介されている。
- (6) 一、系持之儀、家筋御取持被仰付候付、掠入無之様、跡より御趣法嚴重被召立置候間、系図座公事帳之通厳格可取行候、自然後ニ而御法違差通、掠入之者於有之者、百姓江召貶、訟人并次書人系図座役人共者厳科被仰付、在番頭惣横目も其沙汰可被仰付事
- (7) 一、系図座并改方定加勢之儀、系図家譜并仕次調部方、切支丹宗門改帳取メ方、又者諸人勤星取メ方、又者仕次等、大粧之勤候間、日ニ^(ツカ)老ソ星之外、三拾六ヶ月ニ三百五拾日之重星被成下候様、同治三子年訴之

上被仰付候事

(8) 「翁長親方八重山島規模帳」

一、系図方之儀、肝要成役場候処、定加勢老人ニ而太分之系図取調部方手式及兼、間に者間違之儀共可致出来茂難計候間、定加勢今老人加増可申付事

(9) 「八重山島諸締帳」

一、系図方定加勢四人、石垣四ヶ村より老人ツ、人躰相調部申付、勤星年中之事

(10) 「形行書」は乾隆四一年(一七七六)に王府の系図座への報告書である。なお牧野清『明和の大津波』参照。

(11) 「御使者在番記」では、祭文使者二人は五月二十九日到着、同年七月二十二日帰国とあり、後役の二人は翌年四月二十八日到着(帰任年月日は不明)とあって「形行書」とは異なる。しかし「乾隆三十六卯年御手形写」へ八月以前は欠Vの九月十一日付の識名親方・知念親雲上書状の宛名は、「八重山嶋在番野国親雲上様、同筆者座波里之子親雲上様」となっているので、乾隆三十六年には赴任している。従って「御使者在番記」の誤りであろう。

(12) 三人の帰島は未詳だが「乾隆三十六卯年御手形写」の九月十一日付で次の条がある。

一、其嶋諸座道具帳之儀、去三月之大波ニ致流失候間、爰元扣登合ニ而写下候様問合之趣令承達、此節帰帆之役ニ而写下候

(13) この在番筆者慶田筑親雲上は「御使者在番記」にはみえない。しかし「乾隆三十七辰年御手形写」十月九日に次の書状がみえる。

御状致披見候、当春者海上無恙下着役次等相請取、弥御無実被相勤、珍重存候、委曲願舟趣令承達候、恐

惶謹言

十月九日 美里親雲上 高宮城親方

慶田筑登之親雲上様

すなわち三十七年春（三月）には在番筆者として赴任していることが確実である。「御使者在番記」の脱落と
思われる。

（14）「山陽姓小宗（三世長明）家譜」の六世長致である。彼は乾隆三四年大川与人となり同四〇年惣横目と
なる（なお二六〇頁参照）。

（15）致御は「岳昌姓小宗（四世致展）家譜」の七世で学問に秀でていた。彼の譜記には次のように記されて
いる。

口上覚

新川村岳昌氏 杣山筆者故幸地より嫡子

黒嶋より

右者恐多御座候得共申上候、当嶋之儀、遠海相隔諸事城下之様ニハ無之候得共、弥以学文文段算勘相嗜不申
候而者、御奉公差支候訳を以、去ル三拾五年成子、石垣四ヶ村仲師匠定役被召立、四書小学講談仕程之者出
来候ハ、御褒美被仰付筈候間、老若貴賤無構精を出相勤候而、嶋中之名聞相立候様被仰渡置趣御座候、然
処黒嶋素々不如意之者ニ而候得共、四書小学之講談相嗜、此程四ヶ村二才童子共勤出候方無断相教、且当嶋
ニ者、韻鏡存知之方罷居不申、名乗字之儀御国元ハ諷下候処、多分者、名乗字無之差支候処、黒嶋氣を付韻鏡相
嗜、諸人名乗字無之方申出次第、執相与ヘ、且諸加勢御奉公三拾九度、勤星六千三百九拾六日相勤置申候、
依之奉願候儀、近比御成合如何敷奉存候得共、右件之訳別段ニ被思召上、何卒此節明合之若文子・杣山耕作
筆者之間江役昇進被仰付被下度則私共奉願候、左様被仰付御事御座候ハ、余多之奉公人励出、猶以神妙相
勤可申奉存候条、此等之趣何分にも可然様御取成奉願候、以上

（嘉慶十九年）
戊九月

新川村惣下知 仮若文子

石垣より

（以下、十五人略）

彼は翌十月、大川村杣山筆者となった。傍点を付したように、八重山における名乗字の選定の様子をもうかがわせてくれる史料である。

(16) 管見では唯一の素案である。なお刊本の大史姓家譜編集委員会『大史姓家譜』の大宗家譜はこの素案である(ただし、朱書訂正、記事の補充部分は刊本では不分明)。正本は刊本に収録されていない。

(17) たとえば「山陽姓小宗(六世長敏)家譜」の九世長房の「勤書」に

一、同年(嘉慶二二八一八一七)頭以下仮若文子迄勤書仕次勘定筆者、三月十五日同廿五日迄勤日数拾壹日、と記す如きである。

(18) 『球陽』尚敬王八年(一七二〇)条に、「始めて五年に一次、諸士の家譜を清繕することを定む。諸士の家譜は、毎年湊補するを例と為す。その家譜を將て、分ちて五と為し、一年に其の一を謄録して以て聖覽に備ふ。五年に至りて清繕已に竣り、敢へて遺失せず」とある。また梅公姓我那覇仁屋孫著の「勤書」にも次のようにみえる。

① 一、同年(咸豐十二八一八六二)系図仕次加勢八月朔日より十二月廿七日迄勤日数百六拾四日

② 一、同年(同治六八一八六六)系図仕次加勢八月朔日より九月廿八日迄勤日数五拾八日

(19) 『沖縄県史料』前近代1、「首里王府仕置」に全文収録されている。

(20) 同年五月二六日条にも同じく跡目相続願いが六人から出されており、それには「附、書付六枚系図方日記ニ載」と記されている。この書付は願い出の文書で、それが「系図方日記」に記載されたのであろう。

(21) 九人のうち管見の家譜では同文のものが、それぞれ「長興姓小宗(五世善盛)家譜」の九世善庸、「長榮姓小宗(十世真孝)家譜」の十二世真章、「李保姓大宗家譜」の五世喜興の各譜記に収載されている。

(一九八二年一月稿)

表 I 管見の八重山関係系図家譜一覧

No.	家譜名	宗(原・享)	初代	奥書	組合(回数)	備考
1	益茂姓家譜	大宗(原)	一世里安		1・2・3 / 1・2・3	
2	〃	小宗(原)	三世里栄		1・2・3	家格護本
3	倪栄姓家譜	大宗(原)	一世賢生		1・2・3	
4	岳昌姓家譜	大宗(原)	一世致崇		不明	copyの表紙あるも記載なし
5	〃	小宗(原)	三世致取		ナシ	蔵元格護本
6	〃	小宗(原)	三世致経		1・2・3	
7	〃	小宗(原)	三世致森		不明	表紙欠
8	〃	小宗(原)	四世致展		1・2・3	
9	〃	小宗(原)	四世致泰		不明	表紙、昭和25年1月9日に改訂
10	〃	小宗(原)	五世致信		不明	表紙、昭和25年1月9日に改訂
11	〃	小宗(原)	六世致長		1・2・3	
12	嘉善姓家譜	大宗(原)	一世永展		1・2・3・3	
13	〃	小宗(原)	八世永常		1・2・3	
14	〃	小宗(原)	八世永明		1・2・3 / 1・2	
15	〃	小宗(原)	九世永秀		不明	表紙欠
16	〃	小宗(原)	十世永参		1・2	

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
〃	〃	〃	〃	〃	〃	山陽姓家譜	〃	〃	〃	憲章姓家譜	葛孫姓家譜	〃	〃	〃	錦芳姓家譜	夏林姓家譜
小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(原)	大宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(原)	大宗(原)
七世長興	六世長敏	五世長京	五世長良	四世長実	三世長明	一世長光	十一世英叙	七世英応	三世英政	一世英極	一世秀継	十二世用議	八世用烈	七世用重	一世用緒	一世賢永
1・2・3	1・2・3	*1・2・3	不明	1・2	1・2・3・3	1・2・3・3	1・2	不明	1・2・3	不明	1・2・3	1	1・2・3	1・2	1・2・3	不明
			表紙欠					表紙欠		表紙欠						表紙欠
		蔵元格護本		家格護本							家格護本	家格護本				

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	No.
〃	〃	〃	〃	〃	〃	大史姓家譜	慎公姓家譜	向明姓家譜	向道姓家譜	〃	〃	〃	上官姓家譜	守恒姓家譜	〃	家譜名
小宗(原)	小宗(原)	小宗(写)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(原)	大宗(原)	大宗(原)	大宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(原)	小宗(原)	宗(原・写)
七世高豆	七世高興	六世高政	六世高登	六世高誉	五世高満	一世高教	一世寛邦	一世朝基	一世朝載	八世正浮	六世正儀	六世正資	二世正信	一世寛長	八世長列	初代
							有			有						奥書
1・2・3・3	1・2・3・3		ナシ	不明	不明	1・2・3	不明	1・2・3	1・2・3	不明	*1・2・3	1・2・3	1・2・3	1・2・3 / 1・2・3	1・2・3	糺合(回数)
				copyに表紙なし	写真に表紙うらなし	稿本あり、それに奥書がある	表紙欠		家格護本		蔵元格護本	家格護本				備考

65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53		52	51	50
//	//	梅公姓家譜	//	//	//	長興姓家譜	//	//	//	//	//	//		長栄姓家譜	多田姓家譜	大史姓家譜
小宗(原)	小宗(写)	大宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(原)	小宗(写)	小宗(写)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)		大宗(原)	大宗(原)	小宗(原)
三世孫格	三世孫久	一世孫広	七世善政	五世善盛	二世善方	一世善安	十一世真純	十一世真根	十世真孝	十世真邦	十世真帛	五世信本		一世信保	一世督崇	八世高道
			有						有				有			
1・2・3		1・2・3・3	ナシ	1	*1・2・3	不明			ナシ	1・2・3	不明	不明	◎*1・2・3	①1・2・3	1・2	
			蔵元格護本	家格護本	蔵元格護本					蔵元・家格護二冊	表紙欠	明治42年1月8日、表紙替				原家譜から高道以下を別綴

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	No.
〃	〃	〃	〃	松茂姓家譜	文林姓家譜	〃	〃	〃	文珪姓家譜	伯言姓家譜	〃	〃	〃	〃	家譜名
小宗(写)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(原)	大宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	大宗(写)	大宗(写)	小宗(写)	小宗(写)	小宗(原)	小宗(原)	宗(原・写)
八世当剛	七世当計	五世当光	三世当永	一世当義	一世方因	五世師敏	五世師透	四世師算	一世師春	一世政通	六世孫祥	五世孫宜	四世孫俊	三世孫繁	初代
							有						有		奥書
	㊥ 1・2・3 / 1・2・3	㊦ 1・2・3	1・2・3	1・2	1・2・3	1・2・3	不明	不明					*	1・2・3	糺合(回数)
	蔵元格護本		蔵元格護本				表紙欠	表紙欠							備考

(注) 糺合(回数)欄の*印は、「本系図并日記引当」の文言の有無を示す。

89	88	87		86	85	84	83	82	81
林松姓家譜	李保姓家譜	雍長姓家譜		有若姓家譜	毛孫姓家譜	孟功姓家譜	〃	毛裔姓家譜	〃
大宗()	大宗(写)	大宗(原)		小宗(原)	大宗(原)	大宗(原)	小宗(原)	小宗(原)	小宗(原)
一世実盛	一世喜時	一世興昌		九世泰徳	一世盛永	一世康重	五世安広	三世安核	八世当盛
有						有			
		不明	㊦ 1・2・3	㊦ 1・2・3	1・2・3	不明	ナシ	1・2・3・3	ナシ
稿本カ		表紙欠					表紙欠		
			蔵元格護本	家格護本		蔵元格護本			

表Ⅱ 糾合人名一覽

家譜名	No.	本系図并日記引当	一度	二度	三度
益茂姓一世 里安	1		誦 鳩間目差子 黒嶋 ㊦ 請 杣山筆者 古見 ㊦ 誦 筆者 宮良 ㊦ 請 筆者 大浜 ㊦	誦 杣山筆者 古見 ㊦ 請 鳩間目差子 黒嶋 ㊦ 誦 筆者 宮良 ㊦ 請 筆者 安谷屋 ㊦	誦 鳩間目差子 黒嶋 ㊦ 請 川平 ㊦ 誦 筆者 安谷屋 ㊦ 請 筆者 登野城目差 ㊦
益茂姓三世 里栄	2		誦 系図方定加勢 読谷山 仁屋 ㊦ 請 杣山仮筆者 富嶋 仁屋 ㊦ 誦 若 文子 大浜 仁屋 ㊦ 請 同 桃原 仁屋 ㊦	誦 故古見首里大屋子嫡子 稲福 仁屋 ㊦ 請 杣山仮筆者 真謝 仁屋 ㊦ 誦 新川村講談人 石垣 仁屋 ㊦ 請 同 与那原 仁屋 ㊦	誦 登野城講談人 大浜 仁屋 ㊦ 請 登野城村講談人 石垣 ㊦ 誦 登野城目差 大浜 仁屋 ㊦ 請 登野城目差 大浜 仁屋 ㊦
俣栄姓一世 賢生	3		誦 同 阿波連 ㊦ 誦 同 宮良 ㊦ 誦 同 宮良 ㊦ 請 同 安谷屋 ㊦	誦 同 宮良 ㊦ 誦 同 安谷屋 ㊦ 誦 同 宮良 ㊦ 請 同 安谷屋 ㊦	誦 登野城目差 安谷屋 ㊦ 請 登野城目差 安谷屋 ㊦ 誦 登野城目差 安谷屋 ㊦ 請 登野城目差 安谷屋 ㊦
岳昌姓三世 致経	6		誦 同 宮良 ㊦ 誦 同 宮良 ㊦ 誦 同 宮良 ㊦ 請 同 安谷屋 ㊦	誦 同 宮良 ㊦ 誦 同 安谷屋 ㊦ 誦 同 宮良 ㊦ 請 同 安谷屋 ㊦	誦 登野城目差 安谷屋 ㊦ 請 登野城目差 安谷屋 ㊦ 誦 登野城目差 安谷屋 ㊦ 請 登野城目差 安谷屋 ㊦
岳昌姓四世 致展	8		誦 同 与那原 ㊦ 誦 同 与那原 ㊦ 誦 同 与那原 ㊦ 請 同 与那原 ㊦	誦 同 与那原 ㊦ 誦 同 与那原 ㊦ 誦 同 与那原 ㊦ 請 同 与那原 ㊦	誦 同 与那原 ㊦ 誦 同 与那原 ㊦ 誦 同 与那原 ㊦ 請 同 与那原 ㊦
岳昌姓六世 致長	11		誦 故杣山筆者宮良 仁屋嫡子 喜友名 仁屋 ㊦ 請 故耕作筆者国吉 仁屋嫡子 喜友名 仁屋 ㊦ 誦 故杣山筆者 黒嶋 ㊦ 請 故耕作筆者 黒嶋 ㊦	誦 忽下知筆者 大浜 仁屋 ㊦ 請 故耕作筆者 大浜 仁屋 ㊦ 誦 故杣山筆者 古見 ㊦ 請 故耕作筆者 古見 ㊦	誦 忽下知筆者 大浜 仁屋 ㊦ 請 故耕作筆者 大浜 仁屋 ㊦ 誦 故杣山筆者 古見 ㊦ 請 故耕作筆者 古見 ㊦
岳昌姓(不 分明。表紙 のみあり)	.		誦 鳩間目差子 黒嶋 ㊦ 請 杣山筆者 古見 ㊦ 誦 故名蔵目差嫡子 国頭 ㊦ 請 故耕作筆者石垣 ㊦	誦 鳩間目差子 黒嶋 ㊦ 請 故西表目差嫡子 波照間 ㊦ 誦 故名蔵目差嫡子 国頭 ㊦ 請 故耕作筆者 国頭 ㊦	誦 鳩間目差子 黒嶋 ㊦ 請 真謝 ㊦ 誦 故名蔵目差嫡子 国頭 ㊦ 請 故耕作筆者 国頭 ㊦
嘉善姓一世 永展	12		誦 故大目差黒嶋筑 登之 与那原 仁屋 ㊦ 請 定加勢 慶田城 仁屋 ㊦ 誦 系図役 西表首里大屋子 ㊦ 請 系図役 西表首里大屋子 ㊦	誦 定加勢 読谷山 仁屋 ㊦ 請 系図役 西表首里大屋子 ㊦ 誦 定加勢 読谷山 仁屋 ㊦ 請 系図役 西表首里大屋子 ㊦	誦 定加勢 読谷山 仁屋 ㊦ 請 系図役 西表首里大屋子 ㊦ 誦 定加勢 読谷山 仁屋 ㊦ 請 系図役 西表首里大屋子 ㊦

嘉善姓八世 永常	13		読 若 文 子 大浜 仁屋⑩ 請 同 桃原 仁屋⑩	読 西表首里大屋子嫡子 系洲 仁屋⑩ 請 同 真謝 仁屋⑩	請 登野城村講談人 豊川 仁屋⑩
嘉善姓八世 永明	14		読 鳩間目差子 黒嶋 了や⑩ 請 同 古見 了や⑩ 読 同(糸筆者) 波照間了や 森山 目差	読 同(黒山筆者) 古見 了や⑩ 請 同(鳩間目差)子 黒嶋了や⑩	請 読 鳩間目差子 黒嶋 了や⑩ 平得 与人⑩
嘉善姓十世 永参	16		読 故鳩間目差嫡子 石垣 仁屋 請 若 文 子 桃原 仁屋⑩	読 故仲間与人三男 真玉橋 仁屋⑩ 請 新川村講談人 石垣 仁屋⑩	
錦芳姓一世 用緒	18		読 系 正 西表 仁屋⑩ 請 定 加 読 勢谷山 仁屋⑩	読 系 正 長堂 仁屋⑩ 請 定 かせ 与那原 仁屋⑩	請 読 同(定加勢) 読 勢谷山 仁屋⑩
錦芳姓七世 用重	19		読 故新川与人嫡子 石垣 仁屋⑩ 請 故宮良親雲上四男 宮良 仁屋⑩	読 講談師匠 石垣 仁屋⑩ 請 南風原目差 桃原 仁屋⑩	
錦芳姓八世 用烈	20		読 系 正 鶴平名 仁屋⑩ 請 定 かせ 慶田城 仁屋⑩	読 系 正 石垣 仁屋⑩ 請 定 かせ 読 勢谷山 仁屋⑩	請 読 同(定かせ) 与那原 仁屋⑩ 黒嶋首里大屋子⑩
錦芳姓十二 世用議	21		読 系図方定加勢 慶田城 仁屋⑩ 請 同 読 勢谷山 仁屋⑩		
葛孫姓一世 秀継	22		読 惣下知筆者□□ 大浜 仁屋⑩ 請 同□□ 宮良 仁屋⑩	読 同□□ 宮良 仁屋⑩ 請 定 かせ 与那原 仁屋⑩	読 定 かせ 読 勢谷山 仁屋⑩ (請) 黒嶋首里大屋子
憲章姓三世 英政	24		読 故耕作筆者宮良 仁屋⑩ 大浜 仁屋⑩ 請 登野城与人⑩	(読)前耕作筆者石垣 仁屋次男 仲座 仁屋⑩ (請)大川村講談師匠 慶田城 仁屋⑩	(読)耕作筆者大浜 仁屋嫡子 波照間 仁屋⑩ (請) 逆詞筆者 国吉 仁屋⑩

家譜名	No.	本系図并日記引当	一 度 糺 合	二 度 糺 合	三 度 糺 合
憲章姓十一世英叙	26		読 新川目差子 大浜 仁屋 請 杣山飯筆者 真謝 仁屋	読 登野城村講談人 大浜仁屋 請 同 若文字 桃原 仁屋	
山陽姓一世長光	27		読 □□ 与那原仁屋 請 通詞筆者 国吉 仁屋	読 故花城目差四男 村山 仁屋 請 大川 与人	読 故大川与人嫡子 高嶺 仁屋 請 故耕作筆者宮良 大浜 仁屋
山陽姓三世長明	28		読 故□□嫡子 与那原仁屋 請 飯若 文字 源河 仁屋	読 飯若文字 源河 仁屋 請 西表首里大屋子	読 定かせ 善山 仁屋 (請) 同 役 古見首里大屋子 三度糺合
山陽姓四世長実	29		(糺合人名の記載なし)	読 南風見目差嫡子 小浜仁屋 請 大川村講談人 石垣仁屋	
山陽姓五世長京	31	本系図并日記引当 杣山筆者 古見 じゃ 西表首里大屋子	読 糺筆者 波照間じゃ 請 同 上原 じゃ	読 同(糺筆者) 上原 じゃ 請 同 安谷屋 じゃ	読 同(糺筆者) 安谷屋じゃ 請 同 石垣 与人
山陽姓六世長敏	32		読 糺筆者 波照間じゃ 請 同 上原 じゃ	読 同(糺筆者) 上原 じゃ 請 同 安谷屋じゃ	読 同(糺筆者) 安谷屋じゃ 請 同 石垣 与人
山陽姓七世長興	33		読 故仲間(与人)四男 宮良 仁屋 請 耕作筆者 □□ 波照間 □□	読 故西表首里大屋子 □□ 宮良 仁屋 請 通詞筆者三男 国吉 仁屋	読 故仲間与人四男 宮良 仁屋 請 故宮良親雲上四男 宮良 仁屋
山陽姓八世長列	34		読 故宮良親雲上四男 宮良 仁屋 請 故脇筆者嫡子 石垣 仁屋	読 南風見目差嫡子 小浜 仁屋 請 故大浜仁屋嫡子 慶田城仁屋	読 故新川与人三男 真謝 仁屋 請 若文字 □□ 宮良 仁屋
守恒姓一世	35		読 鳩間目差子 黒嶋 じゃ	読 杣山 筆者 古見 じゃ	読 同(杣山筆者) 古見 じゃ

[illegible]

家譜名	No.	本系図并日記引当	一度 度 糺 合	二度 度 糺 合	三度 度 糺 合
大史姓七世 高豆	49		読 惣横目仮筆者 石垣 仁屋④ 請 定加勢 慶田城仁屋④	読 仮若 文字 糸数 仁屋④ 請 西表首里大屋子④	(読) 定かせ 与那原仁屋④ (請) 同 役 古見首里大屋子④ 三度糺合 読 登野城村講談人 大浜 仁屋④ 請 □惣下知若文字 桃原 仁屋④
多田姓一世 督崇	51		読 講談人 石垣 仁屋④ 請 系図方かせ 慶田城仁屋④	読 読谷山仁屋④ 請 大川 与人④	
長榮姓一世 信保	52	①	読 故仲間与人四男 宮良 仁屋④ 請 耕作筆者大浜仁屋嫡子 波照間仁屋④	読 惣下知筆者□□ 宮良 仁屋④ 請 故大目差嫡子 与那原仁屋④	読 惣下知筆者□□ 宮良 仁屋④ 請 同 □□ 大浜 仁屋④
長榮姓十世 真邦	55	同 本系図并日記引当 西山筆者 古見 仁屋④ 同 真謝 与人 西表首里大屋子④	読 糺筆者 阿波連 仁屋④ 請 宮良 仁屋④	読 故脇筆者喜舍場仁屋嫡子 石垣 仁屋④ 請 南風見目差 桃原 仁屋④	読 故脇筆者嫡子 石垣 仁屋④ 請 通詞筆者 国吉 仁屋④
長興姓二世 善方	60	同 本系図并日記引当 黒嶋 仁屋④ 同 花城 仁屋④ 同 真謝 与人 西表首里大屋子④	(読) □□□□ (請) 国頭 仁屋④	読 波照間 仁屋④ 請 石垣 仁屋④	読 国頭 仁屋④ 請 安室屋 仁屋④
長興姓五世 善盛	61		(糺合人名あれどみえず)		
梅公姓一世 孫広	63		読 惣横目筆者 翁長 仁屋④ 請 耕作仮筆者 黒嶋 仁屋④	読 読谷山仁屋④ 請 定かせ 西表首里大屋子④	読 与那原仁屋④ 請 定かせ 古見首里大屋子④

梅公姓三世 孫格	65		誦 真栄里与人嫡子 与那原仁屋 故耕作筆者大浜仁屋嫡子 阿波連仁屋	誦 故政座真仁屋嫡子 翁長 仁屋 請 若 文 子 宮良 仁屋	誦 定 かせ 誦 谷山仁屋 請 黒嶋首里大屋子
梅公姓三世 孫繁	66		誦 □□□□ 國吉 仁屋 請 仮 若 文 子 安村 仁屋	誦 前波照間首里大屋子四男 宮良 仁屋 請 若 文 子 宮良 仁屋	誦 通詞筆者 國吉 仁屋 請 大川村講談人 石垣 仁屋
梅公姓四世 孫俊	67	本系図并日記引当 杣山筆者 古見 じゃ 西表首里大屋子			
文林姓一世 方因	75		誦 故耕作筆者宮良仁屋嫡子 大浜 仁屋 請 耕作筆者大浜仁屋嫡子 波照間仁屋	誦 故耕作筆者宮良仁屋嫡子 大浜 仁屋 請 真栄里与人	誦 □□□□ 國吉 仁屋 請 故□□首里大屋子三男 石垣 仁屋
松茂姓一世 当義	76		誦 糺 筆者 大浜 じゃ 宮良 じゃ	誦 同(糺筆者) 宮良 じゃ 安谷屋じゃ	誦 同(糺筆者) 安谷屋じゃ 登野城目差
松茂姓三世 当永	77		誦 故西表首里大屋子三男 石垣 仁屋 請 南風見目差 桃原 仁屋	誦 故新川与人嫡子 石垣 仁屋 請 糺 合 役 登野城与人	
松茂姓五世 当光	78		誦 糺 筆者 大浜 じゃ 宮良 じゃ	誦 同(糺筆者) 宮良 じゃ 安谷屋じゃ	誦 同(糺筆者) 安谷屋じゃ 登野城目差
松茂姓七世 当計	79	①	誦 (説 欠) 誦 谷山仁屋	誦 新川村故豊平仁屋嫡子 豊平 仁屋 請 同惣下知耕作仮筆者 黒嶋 仁屋	誦 登野城村講談人 大浜 仁屋 請 石垣 与人

家譜名	No.	本系図并日記引当			一度	二度	三度
毛裔姓三世 安核	82	㊥	請読 鳩間目差子 杉山筆者 古見 黒嶋 ゝや 〇	請読 同(札筆者) 大浜 安谷屋 ゝや	請読 杉山筆者 古見 黒嶋 ゝや 〇	請読 杉山筆者 古見 大目 差 〇	
毛孫姓一世 盛永	85		請読 伊志嶺 桃原 仁屋 〇	請読 定加勢 善山 仁屋 古見首里大屋子 〇	請読 登野城村譚談人 大浜 仁屋 新城 与人 〇		
有若姓九世 泰徳	86		①	故崎枝与人嫡子 宮良 仁屋 高嶺 仁屋 〇	故西表目差次男 西平 仁屋 大浜 仁屋 〇	故鳩間與人四男 大浜 仁屋 登野城与人 〇	
		◎	請読 鳩間目差子 杉山筆者 古見 黒嶋 ゝや 〇	請読 杉山筆者 古見 黒嶋 ゝや 〇	請読 鳩間目差子 黒嶋 大筆者 ゝや 〇		